

【その九】繁殖シーズン近づく

一九九八年の七、八月と過ぎても、結局マセたちは一羽もさえずらなかつた。クルもメスだった。メス腹というのが、メス家系というべきか。こうなるとさえずりを伝授できるオスを、意地でも手に入れたくなる。しかしすでに三世代九羽、鳥カゴも五つとなつている。順番的には三代目クルに、婿を迎えなければならぬが、さすがにこれ以上増やすのには二の足を踏んでしまう。

どこに鳥カゴを置くのだ。また多産系だったらどうすりゃいいんだ。

秋の繁殖シーズンを前に、私は八羽の文鳥に枝豆を強奪されながら考え込んでしまったが、とりあえず今年は婿を迎えず一年間様子を見ることにした。まさか手の手りによる繁殖が、こんなにも上手いくとは思っていなかった。これはうれしい誤算というべきか。

ところが思いもかけない誤算は別にも起きた。ゴッドマザーのフクが事故死してしまつたのだ。

八月三十一日の夜の遊び時間、バサバサと落ちる音がして、

「キュー、キュー……」

と鳴く声が聞こえたので驚いてかけつけると、鏡のかけられた壁際で絶命していた。どうも鏡の反射と隣部屋の明かりを間違えて、全力で激突してしまつたらしい。ある程度飛行能力が回復していたのがまずかつたのかもしれない。何しろ間抜けな鳥だったから……。

不器量な二五〇〇円鳥などと呼び、飛べない鳥にしたり、強制洗浄をしたり、フクを散々な目にあわせてきたが、私はこの手の手りでない間抜けで丈夫な白文鳥が好きだった。しかし事故の翌日、独り者になったヘイスケを見ていた私は、財布の中身を確認してから、早くも後妻を買いに出かけた。

女房のいないヘイスケ（妻が死んだことなど理解できるはずもない）は隣の鳥カゴのメスたち、実は自分の娘や孫であるマセやクルたちに色目を使っていたのだ。文鳥に親戚関係の自覚がないのは仕方がないが、人倫の道に背くことを許す



悲劇の一週間前の集合写真、一番奥にフク

わけにはいかない)
その後孵化さえしなければ良いという考えになる。(夜遊びを止めさせるには結婚が一番だ。あのフレイでさえ、今では女房のチビの尻に敷かれてずいぶんとおとなしくなっただくらいだ。

まず歩いていける
Y町のペットショップに行く。隣が鶏肉専門店と言う恐るべき舞台設定を持っているこの店では、桜文鳥メス四〇〇〇円、オス二五〇〇円とあった。

白文鳥はこれより五〇〇円ずつ高い。値段は普通か、オスは少し安い。桜文鳥のヘイスケに白文鳥の嫁を迎えて、またコマ塩の子供が生まれるのは、もう勘弁して欲しいので、桜文鳥のメスを探す。

「脚環をしているのがメスですか。」

きわめてぶっきらぼうに店のおばさんに尋ねる。そうだという。七、八羽入れられたカゴの中にはめぼしいのがいない。脚環をしているのはみんな羽毛をふくらましている。これは病弱の証拠とも思える。しかしペアで六五〇〇円と書かれ、二羽で小ぶりのカゴに入れられている一羽は、華奢だがなかなか姿がいい。ところが脚環をしていない。一緒にいる一回り大きく、クチバシも赤い、オスにしか見えない方に脚環がある。外見では判断しきれないが、ノミの夫婦ではないから、これは間違いだと見当をつける。この脚環はないがたぶんメスの桜文鳥なら、買ってもいいと思いつつ、とりあえず他の店も探すことにする。

京浜急行S駅へいく。ここは前に高価で立派な白文鳥を見かけたところだ。相変わらず破格に高い。桜文鳥のオスで五〇〇〇円以上、メスでは六〇〇〇円以上する。容姿はいいが感動するほどではない。次に行く。

バスで横須賀線T駅。もの寂しい商店街に二軒ペットショップがあったが、一軒はシナモンしか置いていなかった。もう一軒は桜文鳥メス五〇〇〇円、オス一五〇〇円とあった。

まったく小鳥の値段は基準がないとはいえ、店によって差がありすぎる。それにしてもこのオスの値段は破格に安い。容姿も悪くない。この際三代目クルの婿も買ってしまうおつかと心が動くが、まず我慢する。五〇〇〇円ならはじめの四〇〇〇円のほうが私の好みだ。

無駄なところで行動力を発揮して、再びY町。

「桜文鳥のメスがほしいんですけど、このヘアで売られているのは脚環のない方がメスなんじゃないの。」

とおばさんにいう。おばさんはたしかにそう見えるというが、断定し切れずに困っている。他の鳥では駄目なのかときいてきた。

「これ以外なら、いらないなあ。」

私はそっけない。おばさんは話題を転じる。

「お見合いさせたほうがいいんですけど。」

「そうですね、あんまり意味がないんじゃないですか。() ペットショップに連れてきても、落ち着かないで相性なんて分からなかったですよ。」

「そんなことはないんですけど。」

私は何も答えない。そっぽを向いている。おばさんはこのずいぶん文鳥のことを知っているらしい失礼な客がしゃくに障ったらしい。再び話題を転じる。

「手のり文鳥ですか。それじゃあ繁殖は出来ませんよ。うちのお客さんでもうまくいったことはないですよ。」

「そうですね、うちはそれで五代以上(旧王朝を含む)も続けてますけどね。」
おばさん言葉を失う。私としてはおばさんをからかう気はなかったが、客である私がメスかどうか訊いているのに、答えないのだから仕方がない。

それにしても、オスの値段で本当はメスだったら、売り手は損するが、メスの値段で売ったものがオスであっても、商売上何の問題もないはずだ。この場合、

客の私はメスだと言っているのだから、その値段で売っておいて、もしオスだったらお取り替えするとか何とかいっておけば良さそうなものだ。どうもおばさんにはこういう傾向がある。商売人なのに算盤勘定を忘れて、良心的だが融通がきかない。

おばさんの困り顔を見ながら、しかたないので、とりあえずメスということに売るようにおばさんに提案してあげようと思っていると、折よく、どこかに行っていた店主らしいおじさんが戻ってきた。普通おじさんは商売人だから話が早い。おばさんからペアで売られている文鳥の脚環が逆らしいといわれると、ひょいとのぞいて、

「ああ、こりゃ間違ってるなあ。」

と極めて簡単に言う。

「じゃあ、そのメスをください。」

私も間髪入れずに言う。即座におじさんは、ギヤア、ギヤア、騒ぐ鳥を、

「よっ、よっ。」

などとて、小鳥を追いかけて回す残酷さをこまかしながら捕まえ、紙箱に入れる。

会計。実にスムーズに事は運んだ。おばさん啞然。

しかし脚環はなかったのだ。オスの疑いもある。それにペットショップで買った小鳥にはダニなどがたかっている可能性もある。「この鳥は羽毛が全体に薄く、これは害虫のため、一度丸裸になった疑いがあるようにも思われる。家に帰ると、すぐにヘイスケの鳥カゴには入れず、二、三日、予備の鳥カゴに入れ様子を見ることにする」(当時は感染症の危険についてはほとんど考慮していない)。

ただ、夜の遊び時間には出入り口を開けてやる。喜んで出てくるが、すでに風切り羽が三、四枚、そんなに切られていたのでよく飛べない(店で切られたのだらうか)。我が家の手のり文鳥軍団の近くまでつれてくると、にじり寄ってくる。鳥なつっこいようだ。手のり軍団のほうが入りを恐れて遠巻きにしている。

【その十】繁殖シーズン近づく

案の定ヘイスケは、若いメスである我が子や孫に気をとられていた。八月の下

句から粟玉を与えられた彼のクチバシはつややかに赤くなり、隣の鳥カゴにしきりにさえずる。夜、外に出ると、真っ先に若いメスたちに近づいていく。特に孫クルとは相思相愛であるらしく、クチバシをつつきあったりベタついている。前にそのクルの指を噛み切ったことなど完全に忘れているようだ。

せっかくの『嫁』には関心を向けず、ハーレム状態を楽しんでいる。何しろブレイすら追い払うほどの充実ぶりだ。クルといる時は私がさえずっても無視している。

「なんて奴だ。」

あきれた私の前で、連夜奇妙な行動が繰り返された。ヘイスケはクルのそばにすり寄り二羽だけになろうとする。ところがそのヘイスケに憧れているクロが追いかけて回して邪魔をする。当然ヘイスケはこの邪魔者を威嚇して追い払う。一方クルには親友のハンが一緒にいる。ヘイスケはこれにも色目を使う。それを気に食わないらしい追っかけのクロは、ヘイスケに相手にされない八つ当たりもあってハンをいじめる。クロとしてはヘイスケがクルといちゃつくのも許せないが、

これには手が出せないらしい。何か人間にもありそうな話で、クロの態度はいじらしい。

ハーレム王ヘイスケはガツにも言い寄るが、マセにはあまり近づこうとしない。マセというのは、ずいぶんボーイッシュな鳥なのだろつ。そのマセは割とクロと仲がいい。九羽もいると鳥模様も複雑になってきた。



ハーレム状態のヘイスケ（奥）

いかに相思相愛でも、孫との仲など許すものではない。私はヘイスケのカゴに『嫁』を放り込んだ。相性は悪くないようだ。ヘイスケもいじめはしない。ただ相変わらず隣のカゴのネーちゃんたちに気をとられている。これではまずいので、ヘイスケたちのカゴとクロの独りカゴを上下入れ替える。ところが斜め下の四羽のカゴは連結式。クルたちは出っ張ったほうのカゴに集まり、斜め上を仰ぎ見ている。ヘイスケも斜め下をのぞき込み落ち着かない。

そこで、ヘイスケたちのカゴを四羽の上に置く。四羽の横にはフレイとチビのカゴを移動させ、さらにフレイが若いメスの色香に惑わされないように厚紙で目隠しをした。

これでとりあえず落ち着くだろうと思い、次の行動に移る。繁殖するにせよ、しないにせよ、箱巢を用意しなければならぬ。つぼ巢の中に卵を産まれると、取り出しにくいのだ。

私としてはあまり卵を捨てたくない。しかし増えすぎては手におえない。一番いいのは、産まれたヒナをペットショップで引き取ってもらおうことだ。今度の『嫁』で繁殖が成功するか分からないが、ヒナの引き取り先を探しておくと思心だ。

これも歩いていけるY橋商店街の小鳥屋さん。私は、このなかなか感じはいいが、いつ休むか油断のならない小さな店で、箱巢に入れる皿巢や巣草を買いながら、店のおばさんにきいてみる。

「文鳥なんだけど、たくさん生まれたら引き取ってもらえるのかなあ。」

おばさんは安くて申し訳ないけど、引き取るという。私としては、文鳥で商売する気はないのでその点不満はない。

「ヒナが大きくなったら持ってきてもらえばいいのよ。」

ついでに、

「(孵化後)二、三週間くらいいですか。」

と訊くと、おばさんは驚く。

「二週間じゃ、小さすぎちゃって死んじゃうわよ。」

とりあえず応答する。

「え、でも飼育書には二週間と書いてあるし、実際元気に大きくなっていますよ。」

おばさんはさも感心したらしい。

「今は餌も良くなっているから早く（親鳥から）出せるのねえ。私が二十五年前にこの店を出したときは、一カ月が目安だと手引書にも書いてあったんだけどねえ。」

私の持っている飼育書（手引書）が二十年前のものだなどとは、面倒になるので決して言わない。適当にあいづちを打って、とにかくよくお願いしますと言って帰ってくる。

たぶんおばさんの言っているのは販売の手引書だろう。一カ月くらい経ったヒナは丈夫になっているし、羽毛も生え、見た目もかわいらしくなっていて、ペックトシヨップを飾るのに丁度いい。しかし、もし孵化後一カ月も親鳥のもとから取り出さずにいたら、そのヒナは人を怖がって決して手のりにはならない。例えば、マセなんて、生後一カ月ではもう自分で餌を食べていたくらいだ。つまり絶対に、店頭に並べられる前の二週間ほどは、繁殖家なりが餌づけしなければならぬのだ。しかし小鳥屋さんのおばさんは、繁殖家から卸されるヒナを売ればいいのだから、そんなことは知らなくてもまったく問題ない。

ともあれ、これで生まれすぎても問題はなくなった。私は買ってきた皿巢を二回りほど小さく加工して箱巢の中に入れ、その箱巢をヘイスケたちとプレイたちの鳥カゴに据え付けた。

【その十一】意外な急展開

目の前でクロが死んでしまった。一九九八年九月の十七日だった。

その夜も外で遊んでいた。羽毛を膨らませ、団子虫のような姿でチヨコチヨコ動きまわっていた。しかしその体はやせ細り、私は一目で死期の近いのを悟った。

「今晚死んじやうな。」

九月に入って秋めいて涼しかった陽気が、数日前から暑さが戻り、身体の弱いクロの調子を崩してしまったのだ。しばらくするとテーブルの隅で、うつらうつらし始める。足下がおぼつかない。手のひらに入れてもじっとしている。

のぞきに来るプレイを追い払っていると、手のひらのクロは痙攣し始め、もがき、下のこみ箱に落下した。急いで拾い上げるが、もうぐったりとしており、や

がて目を閉じた。

心臓衰弱から発作を起こした感じた。こんな文鳥の死にかたを目の当りにしたことはなかった。文鳥の死は静かに訪れることが多い（この頃はそういった経験しかなかった）。朝起きると、鳥カゴの底で冷たくなっていたりする。ところがフクヤクロの凄絶さはどうしたことだろう。こみ箱で苦しみがくクロの助けを求め目を思い出すと、小鳥とはいえ悲しい。

もともと病弱なクロが二度目の冬を越せるとは思っていなかった。昨年もヒーター（ヒヨコ電球）と胃薬のおかげでようやく命を繋いでいたような鳥だった。しかし涼しくなり、数日前まで元気よくヘイスケの追っかけをしていたのだ。私はヤブ蚊に襲われながらクロを土に戻した。

死んだものは仕方ない。即刻立ち直った私は計画を前進させることにした。クロの死によって鳥カゴが一つ空いたので、四代目計画、つまりクルに婿を迎えようというのだ。これによってヘイスケが孫といちゃつくこともなくなるだろう。

まず京急K駅に行く。「このペットショップで前に私の趣味にあった桜文鳥を見かけていた。しかし、今回はたいしたのがいない。眼鏡にかなうのは一羽だけ。特徴的な顔をした店のジイさんに桜文鳥のオスはいくらかきく。」

「四〇〇〇円から五〇〇〇円くらい。」
なぜ「くらい」なのか問いつめようと思ったが、四〇〇〇円でも財布の中身的に苦しいので、何にもいわずに店を出てしまふ。

その時私にはお金がなかった。経済原理に基づき、私は地下鉄でT駅へと向かった。犬と小鳥だけを商うそのペットショップは、以前、文鳥のオス一五〇〇円と貼紙されていたのだ。

桜文鳥のオスをくれというのと、けだるそつに商売している感じのオバさんはこれがオスだと指さす。この店では、桜文鳥は三つのカゴに二羽ずつ入れられていた。つまりオス、メスのペアが三つあるということだろうから、他にもオスが二羽いるはずだ。しかし、売り物のジャリ犬どもがけたたましく吠える雰囲気と（この店のメインは犬）、この手のオバさんには日本語が通じにくいという第一印象、そして何より一五〇〇円という経済原理によって、ろくに「見る」となく（カゴがかなり上段にあって見にくい）その桜文鳥を買ってしまった。

勘定の段階で驚いた。三〇〇〇円だというのだ。一五〇〇円と小さく書かれて

いたと思ったが、見間違いだっただろうか。非常に不服だったが、それでも高くないので、基本的には紳士の私（他人はそう思ってくれないが）は黙って支払う。

一五〇〇円と書かれた横に、ミクロ単位で×2があったのだろう。

それにしてもこの店は不親切だった。小鳥用の紙製小箱に文鳥を放り込むと、紙袋にも入れずに突き出してきた。不愉快だ。さらに、その箱を大事に抱えてバスを待っていると、どこかのおばさんが、

「ケーキかと思ったら、小鳥なの？ 動くから驚いたわ。」

なんて話しかけてきた。不愉快だ。

不愉快な気分家で家に帰って、買ってきた『婿』を見てみると、今度は不安になってきた。ずいぶん体が細くて目が非常に大きいその文鳥は、メスのように見えたのだ。クチバシは赤い。しかし、細かく説明しにくいのが全体の雰囲気だ。メスっぽい。

これがメスなら、あの店のオバさんにはきつすぎる嫌みを連発してやる。さらに実は三〇〇〇円というのは掛け値で、本当は一五〇〇円なのではないかという気もしてきた。それが真実ならただではおかない、死にたくなるぐらいに言葉の暴力をふるってやる。その点では自信がある。私は不愉快と、不安を、怪しい情念に転化した。

翌日、別人のようなふりをしてT駅の例の店に電話し、文鳥の値段を訊く。桜文鳥のオスは三〇〇〇円だと例のオバさんが答える。掛け値はなかったようだ。オバさんへの不審は軽減した。

しかし『婿』はさえすらない。二十日夜、いつものように文鳥を遊ばせる。手のりでない『嫁』も『婿』も、洗濯バサミで開けられたカゴから出てくる。細かった『嫁』はすっかり肉がついた。性格なのか人間を恐がらない。『婿』のほうは人間に近づこうとしない。それにしても見れば見るほどメスに見える。私はなれなれしく肩にとまっているブレイに命じる。

「ブレイ！あそこに見慣れない鳥がいるだろう。かわいいネーちゃんかも知らないぞ。ちょっと行ってこい。」

精力絶倫のブレイをリトマス紙がわりに使おうというわけだ。昨年同様ブレイとチビの夫婦は、箱巢が入られるとすぐさま卵を産み、この時二個の卵があっ

たのだが、やはりまったくの産みっぱなしだった。嫌な夫婦だ。

フレイは赤目をぎらつかせ『婿』に近づくと。

「ホエ、ホエ、ホッポケケチーヨー！」

『婿』は逃げないし、怒らない。フレイは調子に乗って交尾しようとして背中に乗っかる。逃げない。受け入れる気配すら見せる。これはメスだ。私は確信した。

翌日また例の店に電話する。

「環境が変わるとさえずらなくなったりするのよねえ。まあ、取り替えますよ。いつでもどうぞ。」

何か癪に障る物言いだ。やはり嫌みの二、三個はくれてやるべきだ。私は小型のカゴに『婿』を入れる。楽園のような我が家から、一日中陽の光のささない、水浴びすらできない、さらにジャリ犬の騒音と悪臭のたちこめる所に逆戻りさせるのは気の毒だが、こればかりは仕方がない。

大体小鳥屋で与える餌なんて、ただのからつき粟オンリーだったりする。そしてたまに放り込まれたキャベツの切れ端を、足で押さえて食べるあさましい姿と見たら、悲惨なほどである（当然そういう店ばかりではない）。



加入間もない頃の嫁ナツ（左）と婿サム（右）

例のおバさんは昼飯を食っていたらしい。昼食中と表現したところだが、そんなきれいなものではないさそうだ。口の中で目一杯つめ込んだ飯をもごつかせながら、おバさんはこれなんかどうだと一羽を指さす。おバさんの様子を瞥して、こんなおバに何をいっても無駄という気になった

私は、黙って指し示された桜文鳥を見る。

赤くて立派なクチバシ、やや細いが体格も立派。これは絶対オスだと見当をつける。しかもこの桜文鳥の胸には桜模様の白い斑紋（ぼかし）もある。失楽園の『婿』の胸には一点の斑点すらなかったのとは違う。私の好みの鳥だ。『婿』が異常なくらい大きな丸目だったのに対して、この文鳥はそれよりはいくらか小さなものも好感が持てる。脚も太いし、羽毛もふくらましていない。一目ですいぶんと気に入ってしまった。

早速帰って、今朝まで『婿』がいたカゴに入れる。二時間もするとさえずり出した。

「環境が変わったのに、もうさえずってるよ。」

嫌みな電話をしてやろうかと思っただが、あの手のおババは、

「鳥によって違うのよねえ。」

とか言い逃れるに決まっているのでやめた。

「チュイーン、チュイーン、チュ・チョツ・チョツ。」

新しい『婿』は繰り返しさえずる。かなり甲高い音。異質な声音に我が家の文鳥連は驚いている。

夜、鳥カゴの外に出してやると、またリトマスブレイが頼みもしないのにこの『婿』に近づき、さえずり、交尾しようとした。当然オスだから逃げ出す。見境のないブレイはヘイスケの背中にまで乗ろうとしている。奴をリトマス紙にしようとしたのは間違いだったようだ。

この『婿』はハンサムなので『サム』と名付ける。一方『嫁』はなつっこいで『ナツ』とした。

【その十二】出産ラッシュ

孫婿のサムは数日後にはすっかり我が家の環境になれた（夜遊び以外）。そこでクルと同居させ、箱巢を入れることにした。

一面で適応能力に優れているサムは（カゴの中のことにはすぐになれる）、箱巢など見たこともないはずだが、半日後には中に入り込み、

「キユイーン・キユイーン」

と鼻声？を發して、クルを誘っている。

「クルちゃん、クルちゃん。僕の部屋に遊びにおいでよ。ネエネエ。」
ということが。

どうしたものか箱巢の入り口でクルが迷っていると、隣のカゴのヘイスケがそわそわブランコに乗ったりしている。このヘイスケは昨年も一昨年も、箱巢で子育てしたことをすっかり忘れ、入り口で中をのぞき込みながら、

「えー、誰かいらっしやいますか。」

といった調子で、

「ビー、ビビヨン・ビビヨン・ビビヨン。」

とさえするだけで入ろうとはしない。小心者なのだ。そのくせ、ナツが箱巢の入り口に来ることすら許さず、ましてこのせっかくの若い後ぞえを目障りにして、隣カゴのクルに一日中色目を使っている。

私は隣のぞけないように間仕切りをすることにした。せっかくなので、今までただ鳥カゴを重ねていたのを改め、カゴを乗せる棚を作る。巨大な雑貨屋で材料を購入、その店で購入した化粧板を計画の寸法に加工してもらっているので、私はこれを釘で打ち付けるだけ。大ざっぱに仕事をしとげる。一時間もかからなかった。

ナツはヘイスケが好きなようだし、サムもクル以外は眼中にない様子だった。初めは毎晩の逢引きを楽しみにしていた様子のヘイスケとクルだが、やがてそれぞれに家庭に帰っていった。実はかわいい嫁と、かっこいい婿と同居していたことに気づいたのだろう。ヘイスケは巢作りを始めた。クルも箱巢に入るようになった。かわいい嫁のナツはヘイスケがさえざると、となりで一緒に跳ねている。かっこいい婿のサムはクル以外ならメスでも追い払うほどお堅い。

十月中旬からは出産ラッシュになった。十三日、チビ・ブレイの箱巢に二つの卵、二十四日にはヘイスケ・ナツに四個、クル・サムに一個の卵を確認した。大体四つ産んでから温め（抱卵）はじめ、十六日後にヒナが生まれるとすると、チビ・ブレイの卵のふ化予定日は十月三十一日、ヘイスケ・ナツの卵が十一月九日、クル・サムの卵が十一月十二日となる。この大量出生を恐怖と楽しみのおうちに待つことにする。

出産ラッシュはあらめ方向にも波及した。未婚のゴマ塩三姉妹まで卵を産みだしたのだ。正確にはマセとハン。ハンはいスケに交尾を迫ったり(尻尾を振る)していたので、想定内だったが、マセにはそうだった様子は無かった。ハンが産むのを見てつられたのだろ。お調子者なのだ。

マセのつややかすぎる赤いクチバシは色を失っていき、足も細くなった。卵に養分をとられているようだ。こうした場合、巢を取り上げれば卵を産まなくなるかもしれないが、寒くもなっているので、産むだけ産ませて擬卵とすり替えて様子を見ることにした。この擬卵は自家製のものではなく、市営地下鉄C K駅の巨大なペットショップで、二個八〇円で六つ買っておいたものだ。

予定通り十一月の一日朝に、チビ・フレイの箱巢からヒナのか細い声が聞こえてきた。四日にのぞくと芋虫状のヒナが三つうごめき、卵が二つ残っていた。卵は変色し軽いので中止卵と判断して捨てる。十日、はいスケ・ナツの箱巢からもヒナの声が聞こえてきた。翌朝のぞくと四つの芋虫。ところが昼になると箱巢の入り口に何か物体が転がっている。ヒナだった。すでに冷たくなっている。事故死したのを親鳥が取り捨てたのか、あるいは突然はいスケがかんしゃくでも起こしたのか、その辺はよくわからない。



母性に目覚めたチビの一所懸命の子育て

年下の後ぞえとの
育児では、昨年までの
はいスケとは違って
いた。狂乱しない。相
変わらず懸命に巢作
りもしたし、卵も交代
で温めていたし、ヒナ
にエサを与えてもい
るようだ、落ち着い
ている。エサをあさっ
たりはしない。何より
不思議なことに、夜、
箱巢に入らない。寒い
のに箱巢の上や、ブラ

ンコで一人寝をしている。夜、一度隣の力ゴに間違つて入り、卵を温めていた娘のチビに、嫌というほど噛みつかれたのにこりているのかも知れない。つくづく変な奴だ。

十三日にはクル・サムは箱巢からヒナの声が聞こえてくる。四世の誕生だ。三日後にはぞくと芋虫が三つ、卵が二つ、変色して軽い卵の方は捨てる。

三代が三羽ずつ孵ってしまった。私は頭を抱えながら、それぞれの育児の様子を見守った。プレイはそれまでの女遊びをやめ懸命にエサを食べ、ヒナに与えている。昨年クルを餓死させたのとは違っていた。夫婦交代で外に出てきては、エサをあさる。なぜか栗玉はあまり食べない。栗玉を湯づけにしておく、給餌器でよこせという感じで、給餌器をついついている。給餌器に入れてやると、摘み食いする。手間がかかることおびたしい。ヘイスケ、そしてマセまでも奪い合うようにそれを食べる。

私の自慢の嫁、ナツは手のりでないにも関わらず、毎晩ヘイスケと交代で出てきて、他の鳥がミカンやら甘栗を人の手から奪っていると、大喜びで近づいてきて食べる。屈託がない。婿のサムの方は卵が孵ってからはず、外に出ようとしていない。クルは相変わらず遊び回り、一時間近く経つと帰っていく。この夜遊び妻を、留守主のサムは文句一つ言わずに、

「ギュル、ギュルル。」

と、おそらへ、

「良く帰ってきてくれたねえ。」

といった様子で出迎え、ようやくエサを食べに箱巢の外に出てくる。エサをついばみながら、外で遊び回っている他の鳥の様子を見て、ちょっと遊びに行こうかと首を伸ばすが、やはり箱巢に戻っていき、ヒナにエサを与える。妻のクルは当然といった様子で、サムが箱巢に戻るとまた外に遊びに行ってしまう。いじらしいサム……。

【その十三】出産ラッシュ

日に日にヒナの鳴き声は大きくなっていく。十五日朝、チビ・プレイのヒナを

取り出し、『フコ』『フンコ』を捨て新調した()に移す。かなり大きくなっている。一羽は活発そうでこちらを見ている。一羽は頭が大きくて目が丸く、父親のブレイそっくりだ。一羽は遅れて生まれたらしく、他の二羽より小さい。三羽とも元気で食も太く、たくましい。しかしいずれは手放さなければならぬ。何しろ後に六羽のヒナが控えているのだ。一、二週間差し餌をして、Y橋商店街のおばさんに売り渡すしかないのだ。

今度のヒナ用エサには二〇〇g三五〇円、『天然ドライ野菜』入りのものに、粟玉を同程度、むいたカナリシード(カナリアシードとも言つ文鳥の好物、むきエサの中から耳掻きで選り分ける)少々を混ぜたものを湯づけにし、カキ殻をすった粉や、小松菜をすったもの、気分によってビスケットの粉などを加えたものを与える。見る見る三羽のヒナは大きくなっていった。

二十四日にはもうバタバタはばたくほどで、情が移ってしまって手放したくないが、後のことを考えるとそうもいかない。三世代に卵を孵化させたのは間違いだつたようだ。売るといふ行為はつらいので、やはり生ませるべきではない。しかし冬に巢を入れないのも危険なので、産んだ卵を擬卵にかえる戦法をとるのが私にはベストのようだ。

用事のために元工町の小鳥屋さんに行つて、巢草と擬卵を求める。何気なくヒナがたくさん産まれて大変だという話を店のおばさんにする。人がよくおしゃべりな上、面倒見の良いおばさんは、それを聞くとき擬卵を探すのを忘れはて、桜文鳥のヒナの仕入れ値が「ヨンパチ(四八〇円か)」「に下がつてるとか、店賃やエサ代を入れると儲からないとか、しゃべり出した。

不景気で、あまり手のり文鳥は売れないらしい。店には売れ残つて大きくなつたヒナが五羽ほどいる。みんな桜文鳥！

「こつなると、売れないのよねえ。」

おばさんため息。なんでも話しそつだが、「こつでおばさんの財務経営の相談に乗る気はないので、

「三羽ぐさいなら、おばさんが引き取つてやるよ、にいちゃん早く持つてきな。」
とつ言葉に感謝しつ(横濱の人は言葉が荒い)、擬卵のことに触れずに出てくる。

擬卵は帰途別のペットショップで他種用のもの(大きさは同じだが、薄い青緑

色をしている)一ツ三〇円を一〇個)おまけ一個含む)買いながら考える。

ヒナはあまり大きくなりすぎると売れないらしい、Y橋商店街のおばさんは一月と言っていたが、もう持っていたたほづがいいだろう。それにしても桜文鳥は白文鳥より人気がないとさっきのおばさんも言っていた。あの三羽は引き取ってもらえるのだろうか。

夕方五時に家に着くと、愛しい三羽を、大きくなったので今朝からフコから移しておいた、底にフラを敷いたプラスチック製のマスカゴごとナップザックに入れ、それを抱えてY橋商店街に向かう。心では『ドナドナ』を歌っていた。

ある晴れた昼下がりに、市場へ続く道。荷馬車がごとごと子牛をのせていく。かわいそうな子牛、売られていくよ。かわいい瞳で見ているよ。

ドナ、ドナ、ドーナ、ドーナ、子牛をのせて。

ドナ、ドナ、ドーナ、ドーナ、荷馬車は行くよ。

おそらく題名も歌詞も間違っているが、私の気持ちは実にこの『ドナドナ』調に暗く重いものだった。

店先には無料で売られている?猫三匹、柴犬の雑種が二匹・・・、これは五〇〇〇円だそうだ。雑種の犬に五〇〇〇円出すお人好しがいるとは思えないが、おそらく委託販売というやつだろう。すすすすしい飼い主だ。要するにこのおばさんは来るものを拒まずといった姿勢なのだろう。

ヒナを見たY橋商店街のおばさんは手放しの喜びようであった。

「まあ、まあ、よく大きく育てたわねえ。これくらい大きいと、安心なのよねえ。何しろお客さんは、いくらおばさんが言ってもヒナに触りすぎちゃうから、小さいと病気になっちゃうのよねえ。」

おばさんは、上機嫌でプラスチックの升カゴにティッシュペーパーを敷き、愛しい三羽を移していった。他にヒナはいない。私は彼らがいい飼い主に恵まれることを祈りつつ見守った。

「問屋さんのヒナよりも、自家繁殖のヒナの方が丈夫なのよねえ。エサがいいから。組合で決まってる、一羽五〇〇円しか出せないのよねえ。早速安く売らなくちゃ。」

一五〇〇円もらって、帰路につく。Y橋商店街は繁華なところだから、閑静な元E町よりも商品動物の回転が格段に早いのだろうか。とっくに売り切れて、一



フゴにうごめく6羽のヒナたち

羽もヒナがいなかったのかもしれない。縁日のヒヨコみたいなものだ。乱暴なアホガキなんかに買われたら、と考えると胸が痛む。

嘆いてもいられないので、夜にはヘイスケ・ナツのヒナを取り出す。チビ・フレイのヒナに比べるとだいぶ小振りのようだが、三羽とも同じ大きさ、同じ姿で整っている。

個体の識別は相当難

しい。それらは、ほんやりした一卵性の三つ子のように愛くるしい。

二十六日夜、クル・サムの間から聞こえてくるヒナの声がずいぶん騒々しくなった。数えてみると孵化十二日ほどだが、のぞいてみることにする（この頃はとにかく音難中のぞいたりせず、掃除も控えるほどだったが、最近あまり気にしなくなった）。例によって夫のサムが抱きかかえて子守をしているが、その脇腹からヒナがはみだしている。かなり大きい。三日早生まれのヘイスケ・ナツのヒナと遜色ない。ヘイスケ・ナツのヒナの方が頭に毛が生えてきているのに比べ、まだハゲてはいるが、体格ではむしろ上回っている。十二日目にして、すでに毛が生えていたマセほどではないが、もう取り出した方が良さそうだ。

フゴの中に六羽のヒナがうごめく。なかなか壮観だ。エサを与えてみる。

ヘイスケ・ナツのヒナは二じんまりして口も小さく、給餌器を口に入れるのに苦労するが、クル・サムの子は（四日目）はスッポリ入れられるほど大きい。ずいぶん違うものだ。声も四日目の方が大きくなってきた。桜文鳥であるヘイスケ・ナツのヒナは、クチバシも真っ黒だが、曾祖母が白文鳥の四日目たちはク

チバシの根本が黄色に剥けた感じで、黒くない。混ぜてしまつと、どちらの子供か区別がつかなくなるかと思つたが、その心配はなさそうだ。しかし、この六羽の半分は『ドナドナ』しなければならぬ……。

【その十四】出産ラッシュ

第二次『ドナドナ』を実行した日は冷たい雨が降っていた。六羽のうちの三羽をY橋商店街に連れて行く私の心は暗かった。

それにしても、この三羽を選ぶ作業は困難なものであった。とりあえずヘイスケ・ナツのヒナを一羽、クル・サム・ヒナを二羽残すことにしたものの、ヘイスケの子供たちは、一卵性の三つ子のように外見上見分けがつかない。皆、小さくて利発そうな顔つき、少々行動力に違いがあるようだが、それも格別の個性といえるものではない。どれも同じに思えて選ぶ基準がない。何か判断材料がないも

のか、子細に眺め比べ、ようやくひとつの相違点を見つけた。三羽とも全体に濃い灰色だが、翼に数本の白い羽が混じっており、その白い羽の数が異なっている。そこで一番白い羽の少ないヒナを残すことにする。

クル夫婦の子供のほうは、外見的にもそれぞれ特徴的だった。成長が早く長仔らしい一羽は、父親のサム似で、目も大きく端正な姿をしている。次仔と思われる一羽は、翼にすら白い羽がなく真っ黒で、鳴き声がしゃがれている。未仔らしい成長の遅れぎみの一羽は、丸目で、なんとなく祖父にあたる



『ドナドナ』直前の6羽のヒナたち

ブレイの雰囲気を感じさせる。当然端正な長仔を残すとして、残りの二者択一が問題であった。私は、ハスキー声で真つ黒な次仔を選択する気持ちに傾いていたが、一応ほかの人間の意見も聞いてみると、手近にいた母親は末仔の方を推奨する。特に推奨する理由がないと言つのがかえって気にかかる。さらに成長の遅い末仔を『ドナドナ』する不安もあったので、結局そちらを残すことにした。

雨の中、またしても『ドナドナ』を頭の中で熱唱しながら、例の小鳥屋さんに向かう。

「まだ、前の三羽も残ってるのよ。」

意外というか、平成の大不況下にあつて当然というべきか、第一次『ドナドナ』の三羽は売れ残っていた。見せてもらつことにする。

「ガア・ガア！」

やかましい。ずいぶんと大きくなり、皆、丸々肥えている。特に一羽、大きくて父親のブレイを彷彿とさせるのがいる。思わず欲しくなってしまったが、そんな馬鹿な話はないので、グツとこらえる。

「(前のヒナが)売れ残っているんじゃあ、申し訳ない。」

私は、この上三羽も引き取ってもらつことに恐縮した。

「あら、大丈夫よ。こういうのは正月に出る(売れる)のよ。」

お年玉でふくれた子供のポケット、おとそ気分の大人の衝動買いを当てこんでいるらしいオバさんは、あくまでも強気だ。が、そつとまく運ぶだろうか。

ともあれ、また一羽五〇〇円、二羽で一五〇〇円を茶封筒に入れてよこす。『ドナドナ』に精神的苦痛を感じている私は、もつヒナは孵さないようにすると言つと、オバさんはいかにももつたいないといった様子。卵を産ませないと、かえつて体に悪いものだとか言つて、春にはまた孵したらと薦める。適当に相槌を打ち、御礼を言つて帰路につく。

それにしても、オバさんの話をどう解釈すべきであろうか。本当に卵を産ませないと体に悪いかはわからないが、その点は卵を産むだけ産ませ、片っ端から擬卵に替えてしまう方式をとつても問題はない。しかし、「春」と言つたのはどうだろう。深読みすれば、ヒナは当分要らないという意味ではないか。要するに孵さないほうが良い。と、歩きながら結論する。

【その十五】充実する環境

一九九九年春、大枚を投げ、数ヶ月前に自作した文鳥柵だったが、我が家のきれいな文鳥たちの連続水浴び攻撃の前に、早くも朽ち果てる兆候が見られるようになった。わざわざ化粧板を用い、表面にはビニールコーティングまでしてあるのだが無駄であった。このままでは二年で崩壊すると私は判断し、とりあえず水浴び被害を減らそうと、フード付の水浴び器、『アウトバーードバス』を導入することにした。

せっかくの浴室になかなか慣れない文鳥を見ながら、手狭にもなってきたし、将来はスチール製の柵にでも替えないといけないと思っていたら、目の前の広告に理想どおりの品物が載っている。高一五〇cm、幅九〇cm、奥行き三五cm、可動式の格子状柵は、五〇kgの過重に耐えるとある。鳥力ゴは高四五cm、幅三五cm、奥行き三〇cmくらいだから丁度いい。五〇〇〇円、先着二〇名なんて書いてある。男のわりに物価にかなりさとい私は、即座に安いと判断し、購入する。そして重荷を担いで家に運び込み、早速ガチャガチャ組み立て、鳥力ゴを配置する。五つの鳥力ゴがスチール製の柵に並ぶ姿は、さながら団地かマンションであった。2DKバス付、新婚夫婦向きといったところか。飼い主の惨めな生活をよくよに、賢沢になったものである。

こうした環境の元で、『トナトナ』を免れ当然のようにすくすくと育った三羽は、それぞれソウ・グリ・ガブと名づけられた。例によって深い意味はない。ヘイスケの仔で聡明そうな顔立ち、ちびで「総身が知恵」といった雰囲気なので『ソウ』、父のサムに似て目が大きいので『グリ』、ガブガブ言いながらエサをねだっていたたれ目の遅生まれが『ガブ』となったのである。

生後一月弱で飛びまわるようになった三羽は、例によってめまぐるしく群れ飛び遊ぶ。昨年のマセたちを放し飼いの状態にし、帰宅拒否症にしまった反省から、遊び時間は朝と夜に限ったが、この三羽の行動範囲は広く危険であった。歯ブラシをかじり、たれさがっている電気コードの上に乗る、それを揺らして遊んだりしている。感電したりしないかと気が気ではないが、幸い事故は起こらなかった。

そして三月になると、他の二羽以上に堂々たる体格に成長した末っ子ガブが、



家に残った3羽、グリ（奥）、ソウ（中）、ガブ（前）

早くも手のひらの中でグチュグチュと言いつつ出た。生後四ヶ月足らず、さえずりの練習のぐぜりを始めるには早過ぎるのだが・・・（実際は生後三ヶ月くらいでは始めるものが多い。この頃は奥手のヘイスケを基準に考えているようだ）。

このガブは、全体的な雰囲気は祖父にあたるブレイに似て間が抜けている。例えばある日三羽がカーテンレールの上に乗リ、

カチャカチャ、いろいろつついて遊んでいるうちに、悲鳴が起った。何事かと見上げると、ガブがもがいている。よく見ると頭がカーテンレールに挟まって抜けなくなっているようだ。大変。救いに行くが、自力で抜け出す方が早かった。頭がでかいから挟まるのだ。私は呆然としているガブを捕まえ、異常がないか調べてみる・・・異常であった。顔半分がふくれて、お岩さんのような状態になっていた。

幸いこの腫れは跡を残さず、元のたれ目に戻ったガブは、相変わらず手のひらで、グチュグチュ言い続ける。祖父のブレイも人の耳元で、何やらグチュグチュ言うが、こんなところも似てしまったのだろうと思っていると、四月になると兄のグリと一緒にあって、本格的にぐぜり始めた。早熟だったようだ。ブレイの遺伝子ははかりがたい。

とにかく、ヘイスケ以来初のオス文鳥なので、私は張り切ってさえずりを仕込みにかかった。

「『ユー・ユウミン・ユウミン・ユウミン・・・』、どうだ素敵だろう。君たちもこのようにさえずりなさい。」

ところが二羽は感動しない。無関心。それどころかブレイのさえずりの真似を始めた。よりによって、「ホップポケケチーヨ」とは。私はあせったが、強力な隔世遺伝の力の前には屈服せざるを得なかった。

さて、五月にはまたお客さんがきた。二年前と同じ一メートル以上の奴が、大きすぎて中に入れず、鳥カゴの周りを徘徊し、文鳥たちを恐怖のどん底に落としているのを朝食中の私が発見した。蛇である。二度目なので、今度は慌てず取り押さえる。さてどうしたものか、未遂だから逃がしてやる。いらぬ殺生をするものではない。仏心を動かしかけた時、奴は運悪く私の手をかじってしまった。傷害犯の末路については、多くを語るまい。

つづく